

## る ルーティンにならない三原則

話し合いの方法としてワークショップというグループワークがある。この方法については、詳細を語り出すとキリがないほど奥が深いのだが、カタチだけ真似しようとするると簡単にできてしまうのが厄介だ。適当な人数でグループをつくり、付箋紙に意見を書いて出し合い、進行役のファシリテーターがその付箋紙を整理して、このグループではこんな意見が出されましたと発表して、めでたしめでたしとしてしまう。

このワークショップという手法は、参加・協働のまちづくりが注目されてから普及していったもので、他人の意見に耳を傾け、互いに何かを気づけたり学びあったり、創り出したりすることができると話し合いの方法だ。そのような話し合いが生まれるためにはしっかりと企画や詳細な運営計画が必要になる。そこをいい加減にしてしまうと、先に書いた付箋紙出しのルーティンになってしまう。当然、話し合いの成果もその時の運まかせで、良い話し合いができないと主催側の行政などは住民の話し合いに懐疑的になって、政策の都合に合わせて話し合いを誘導してしまう。

そうならないためには次の3つを押さえることが大切だ。一つ目は、何のために話し合いをするのかという「目的」を明確にすることだ。もつと言えど何のために住民の意見を聞くのかということだ。そこが曖昧だったり、「手続き上」とかで形式的に話し合いの場を持つというのでは、参加する側にも意味がない。二つ目は、その話し合いの「成果」をどのように政策などに生かすのかということを明確にすることだ。話して終わりでは、参加する側が参加や協働のまちづくりに懐疑的になってしまう。そうして三つ目は「誰」に話し合いに参加してもらうかだ。話し合いの主題に対して当事者の声が必要なのか、特定の立場に偏らず幅広い層の声が必要なのか。目的や成果の生かし方にも関連する重要なファクターだ。少なくともこの三つについてきちんと考えてからワークショップなりをやって欲しいと思っっている。

この「ルーティンにならない三原則」は、ワークショップだけでなく、まちづくり計画などを検討する際にも思い返して欲しい。何を目的に誰のために。そして結果はどうまちに活かしていくのか。